

## 展望論文

## 日本社会の変容とキリスト教用語

小川 俊輔 (広島経済大学)

本稿の目的は、日本におけるキリスト教用語の歴史を社会との関連で記述することである。1549 (天文18) 年、ザビエル Xavier が来日し、日本キリスト教史は幕を開ける。当初、キリスト教は広く受け入れられたが、やがて禁教時代を迎え、信者は厳しい迫害を受け、信仰を守り続けたキリシタンは長期間にわたる地下信仰を余儀なくされた。近世末、開国とともに再び宣教師が来日するようになると、キリシタンは歴史的な復活を遂げ、教会に戻ることとなった。このような歴史的経緯を背景に、九州西北端の長崎・天草地方では幾度も布教用語 (訳語) が変更され、その結果、特異な言語現象が行われるようになった。また政府のキリスト教禁教政策は、人々の間にキリスト教邪教観を醸成し、この邪教意識を背景に、いくつかのキリスト教用語がネガティブな意味を持つ語、差別語として使用されるようになった。戦後、この邪教観が薄れるにつれ、そのような言語使用は次第に行われなくなっていく。近年、日本人にキリスト教が身近なものとなるにつれ、商業主義によるキリスト教用語の積極的な利用や、芸術作品での利用、文化財としての記録・保存活動がみられるようになった。今後、この傾向はいつそう強まるものと考えられる。

キーワード：日本社会の変容、キリスト教史、キリスト教用語、差別語、受容

## Transformation in Japanese Society and Christian Vocabulary

Shunsuke OGAWA (Hiroshima University of Economics)

The purpose of this paper is to describe the history of Christian vocabulary in Japan in relation to society. The history of Christianity in Japan began with the arrival to Japanese shores of the Jesuit missionary, Francis Xavier, in 1549. After its introduction, Christianity went through periods of encouragement, prohibition, persecution, a long period of concealment, and eventually revival. Christian vocabulary items originally introduced by the missionaries were translated in various ways over time. This was particularly the case in the areas of Nagasaki and Amakusa where Christianity was particularly strong and contributed to several linguistic phenomena peculiar to these regions. Official prohibition of Christianity resulted in a generally negative view of the religion and its adherents, and some words introduced by the missionaries came to be used in a discriminatory fashion. After World War II, such negative connotations died away. In recent years a more positive use of Christian vocabulary in the promotion of tourism and the marketing of local products and arts and crafts, has accompanied the recognition of the missionary period as an important part of the regional history of the Nagasaki and Amakusa areas and the drive to preserve this aspect of Nagasaki and Amakusa's heritage.

**Key words:** transformation of Japanese society, history of Christianity, Christian vocabulary, discriminatory word, reception

## 1. はじめに

## 1.1 目的と方法

本稿は、日本におけるキリスト教用語の歴史を

社会との関連で記述することをめざす。対象とする期間は、1549 (天文18) 年から2010 (平成22) 年までの461年間である。これまでキリスト教用語については、実態を明らかにする記述的研究が進めら

れてきた。しかし、それが社会でどのような役割を果たし、人々からどのように意識されているかということについて考えることは少なかった。特にこれを社会の変容と関わらせながら通史的に記述したものはこれまでなかった。そこで本稿では、各時代におけるキリスト教用語が人々からどのように価値づけられ、使用されてきたのかについて整理する。その際、キリスト教用語に関する記述的研究の他、歴史学や民俗学などの先行研究を可能な限り幅広く参照する。また、筆者が九州地方で行ったフィールドワークによって得た情報を加味して考察を進める。

## 1.2 記述の枠組み

前節のとおり、本稿はキリスト教用語をめぐる評価・活動を社会の変容と関わらせながら通史的に記述することを目的としている。本稿のように、ことばの社会的位置・価値の歴史を社会の変容と関連付けて記述したものに、小林(1996)、井上(2000)、陣内(2007)がある。小林(1996)、井上(2000)は、各時代における方言をめぐる評価・活動の実態を記述したものである。陣内(2007)は、小林(1996)、井上(2000)の成果を踏まえ、方言をめぐる評価・活動の変遷を、その背景にある人間の心理、その心理に影響を与えた時代の志向性・パラダイムの変容と関連付けて論じたものである。小林(1996)、井上(2000)、陣内(2007)によって整理された記述の枠組み、特に、陣内(2007)が明確にした「社会⇔人(心理)⇔言語」という枠組みは、キリスト教用語の歴史を記述する場合においても有効である。なぜなら、たとえば「キリシタン禁制」や「憲法による信教の自由の保障」などの社会状況は人の心理・思考(キリスト教に対する意識・態度)に影響を与え、それがキリスト教用語をめぐる評価・活動に影響を及ぼしてきたからである。本論(次章)ではその具体相を明らかにしてゆく。

そこで、本論に入る前に、次節において日本キリスト教史の時代区分を行うことにする。本論では、その時代区分に基づいて各節冒頭に各時代における日本社会の状況を記し、キリスト教が人々からどのように価値づけられ、認識されていたかを示す。そして、社会状況やキリスト教に対する価値づけ・認識と関わらせながら、キリスト教用語に対する評価

とキリスト教用語をめぐる活動について整理する。

## 1.3 日本キリスト教史の時代区分

日本キリスト教史は、人々のキリスト教用語に対する評価、キリスト教用語をめぐる活動の変遷過程から、以下の全5期に区分することができる。中世近世受容期[1549(天文18)年(キリスト教の伝来)～1644(寛永21)年(最後の宣教師殉教)], 近世禁教期[1644(寛永21)年～1854(嘉永7)年(日米和親条約)], 幕末維新復活期[1854(嘉永7)年～1873(明治6)年(切支丹禁制の高札撤去)], 近代差別期[1873(明治6)年～1945(昭和20)年(太平洋戦争終結)], 戦後受容期[1945(昭和20)年～現在]。

## 2. 本 論

### 2.1 中世近世受容期 [1549～1644年]

#### 2.1.1 社会状況

日本キリスト教史は、1549(天文18)年のザビエル Francisco de Xavier らの鹿児島上陸に始まる。当時の日本には全国を統べる絶対的権力者がおらず、キリスト教の受容は各国領主の方針に従って進んだ。たとえば織田信長はキリスト教を保護し、九州では一部の大名がキリスト教に入信し、領民を集団改宗させた。彼らは、キリスト教を高く評価し、歓迎したのである。その後も教勢の拡大は続いた。しかし、1587(天正15)年の豊臣秀吉による「伴天連追放令」の発令により転機を迎え、やがてキリシタン禁制の世となる。しかし、近世初期は禁制下にあっても宣教師の来日が途絶えず、信者は増え続けていた。禁教令が出された1614(慶長19)年当時のキリシタン人口は37万人前後にのぼる(五野井, 1990)。

#### 2.1.2 布教用語の変遷

当期における渡来宣教師の布教用語の問題については既に多くの先行研究がある(土井, 1933; 岸野, 1986; 宮崎, 1998など)。宣教師は、キリスト教の教義や信仰に関わる概念を説明する際に仏教語を借用した。布教責任者であったザビエル Xavier らが、キリスト教の教義を日本人に理解させるためには、それらの概念を日本語に翻訳して伝えるべきだと考

えたからである。たとえば「神」の概念を表す語として「大日」が用いられた。この方法は当時の民衆のキリスト教理解に役立ったが<sup>1)</sup>、キリスト教と仏教とを同一視させ、誤解させる危険性をはらんでいた。実際に彼らは「新しい仏教の一派を広めに来た仏僧」であると誤解されている(岸野, 1986; 宮崎, 1998)。

その後、ザビエル Xavier にも真言宗における「大日」如来がキリスト教における「神」概念とは異なることに気付き、「大日」を廃してラテン語の Deus を用いるようになった。次に引用する宣教師ガゴ Balthasar Gago の書簡(1555(弘治元)年9月8日付)には、その経緯が説明されている。引用は村上(訳)(1968)による。

我等は日本人がその宗旨において用ふる言葉をもって真理を説くこと長期間にわたりしが、虚偽の言葉をもって真理を説く時は誤解を生ずることに気づき、直に有害なりと認めらるる言葉に代へて我等の言葉を教ふることに変更したり。新なる事物は新なる言葉を必要とするのみならず、日本の言葉の真意は、我等が言はんと欲するものと甚だ相違せり。

1590(天正18)年には、宣教師の手によって西欧から活版印刷機が持ち込まれ、多数の文献が出版された。次に引用するのは、1592(天正20)年に出版された『Doctrina Christan』の一部である。橋本(1961)による。

クルスの道を以て一切人間の御助け手となり給ふが故に、此の御恩を取分ぎ信じ、其に憑を懸け奉り、アニマ、色身の用ある時は、此の御主よりと、サンタエケレジャより教へ給ふオラシヨを以て頼み奉りて、十のマンダメントを守り、定め給ふサカラメントを授かり奉る事肝要なり。斯の如く勤め終るに於ては、遂にパライズの楽を蒙り、インヘルノの苦を遁るべき事疑無し。

このように、宣教師が伝えた新しい概念は、布教当初は仏教語による翻訳をとおして、その後、原語

をそのまま音訳するかたちで人々に受容されていった<sup>2)</sup>。しかしこの後、布教者は布教用語に関する方針を幾度も改め、それが九州西北部地域において特異な言語現象が生まれる要因となった。以下では、特に原語を音訳するかたちで日本へ持ち込まれたキリスト教用語を中心に論を展開してゆく。

## 2.2 近世禁教期 [1644～1854年]

### 2.2.1 社会状況

最後の宣教師小西マンショが殉教したとされる1644(寛永21)年以降、日本には一人の宣教師もおらず、一つの教会も存在しない状態が200年以上続いた(宮崎, 1996)。江戸幕府によるキリシタン禁制政策は、九州に潜伏キリシタン・カクレキリシタン<sup>3)</sup>を生み、他方で民衆の間にキリスト教邪教観を醸成していった。

### 2.2.2 キリスト教用語の変化・変容

#### 2.2.2.1 「吉利支丹」から「切支丹」への変遷

キリスト教・キリスト教徒を意味する「キリシタン」はポルトガル語 *Christão* を音訳した語である。仮名で「キリシタン」「ぎりしたん」、漢字で「吉利支丹」「切支丹」「幾里志多無」などと表記された。中世近世受容期以来、宣教師は他のキリスト教用語と同様に仮名を用いて *Christão* を表記していた。しかし、当期以降、「キリシタン」を敵視する人々は「鬼利支端」や「切死丹」など、見る人に悪い印象を持たせる漢字を用いて表記するようになった。また、五代将軍綱吉の治世以降、綱吉の「吉」字をはばかって「吉利支丹」の表記は用いられなくなった(日本国語大辞典第二版編集委員会, 2000-2002)。

#### 2.2.2.2 「バテレン」の変容

長期間にわたる禁教政策の結果、キリスト教用語の意味と語音はことごとく変化していった。「バテレン」はポルトガル語 *padre* (神父) に「伴天連」などの漢字があてられ、その字音によって生じた語である。「バテレン」は江戸中期から明治にかけてキリスト教とその宗徒に対する偏見を含んだ俗称として用いられた。このため、江戸時代中期以降は「荒々しい芸風」を意味したり、俠者の一派を「ばてれん組」と称したりすることもあった(日本国語大辞典第二版編集委員会, 2000-2002)。これは、キ

リシタン禁制政策により醸成された民衆のキリシタン邪教観を背景に、キリスト教用語が差別的な意味を持ち、あるいはマイナス評価を表す語として使用されるようになった事例である (2.4.2 参照)。

### 2.2.2.3 オラシヨの呪文化

次に引用するのは、長崎県平戸市生月町の潜伏キリシタン・カクレキリシタンが代々伝えてきた祈祷文である。長崎県教育委員会 (1999) による。

黒すの道を持て、一済の人間を御助けと成る給ふか故に、其の御恩六を取決身上持て、其れにたのみを掛け奉りて、有ま祝しみ要ある時は、此の御名良地と三太いきりじやの教へたる御らつしやを持てたのみを掛け奉りて、遠のなだめんとうをまぶり定め給う成。さからめんとうを授かり奉る事かんにやう成。斯の如く務めあるに於ては、許し給ふべくとの御事成。遂にはパライズのたのしみをこうむるインヘリ堂の苦しみをのがるるべく事おたかひなし (ウタガイナシ)。此れ成。あんめーぜす。

一見のとおり、2.1.2 に引用した『Doctrina Chriftan』と酷似している。しかし、カクレキリシタンの習俗について総合的な調査を行った宮崎 (1996) は「日本文のオラシヨ (祈祷文のこと一引用者注) はその意味を理解しようと努力すれば可能であるにもかかわらず、まったくその努力はなされていないといつてよい。立て板に水のごとく、いかに早く流暢に暗唱することができるか、という点のみ関心が払われている」(p.85) と述べる。禁教により宣教師が日本を去り、キリシタンが地下信仰を余儀なくされた結果、オラシヨが呪文化したのである。

### 2.2.2.4 キリスト教用語に対する仏教の影響

長崎県の黒崎地方と五島地方における潜伏キリシタンの口頭伝承『天地始之事』は、日本におけるキリスト教の土着化と多宗教の混交状態を示す史料である。史料としての価値評価については後で触れることとし (2.5.2.2)、ここではキリスト教用語に対する仏教の影響を示すものとして取り上げる。引用は海老澤ほか (校注) (1970) による<sup>4)</sup>。底本は文政

年間 (1818 ~ 1830) の書写と推定されている。

御身のたまいけるは、天の高さ地のふかさ、八万余ぢよう、仏とおがむは、天の御主天帝、人間の後世のたすかりを、なさしめたもふ仏これ也。此ほとけ天地日月御つくり、はらいぞといふ極楽御つくり、人間万物、みな、ありとあらゆるもの、此ほとけ思召まゝに、つくらせたもふ也。

天帝 Deus が「仏」、はらいぞ Paraiso が「極楽」となっている。仏教の影響は明らかである。キリスト教用語に対する仏教 (仏教語) の影響は中世近世受容期からみられ (2.1.2)、宣教師が去った当期にはいつそうその傾向が強くなった。

## 2.2.3 中央の文献に記録されたキリスト教用語

### 2.2.3.1 排耶書に記録されたキリスト教用語

当期、キリシタン排斥を目的とした多くの書籍が著され、その中で多くのキリスト教用語が使用された。これは非キリシタンにキリスト教用語が記録され、受け継がれたことを意味する。以下は雪窓宗崔著『対治邪執論』(1648 (正保5) 年刊) の一部である。引用は海老澤ほか (校注) (1970) による。

是寸須の人となりや胆大鹿心、虚妄巧見。釈氏に帰すといへども、ただその名相を学び、その窮玄に到らず。偽りて釈氏の法相を竊み、還、外道邪見をなす。あるいはその名を改めてその実を執り、あるいはその事を同じくしてその理を異にす。故に梵天王を改め泥烏須と名づけ、諸梵衆を改め安助と名づけ、天堂を改め頗羅夷曾と名づけ、人道を改め附婁伽倒利夜と名づけ、地獄を改め因辺婁濃と名づけ、灌頂を改め婆宇低寸茂と名づけ、懺悔を改め混毘三と名づけ、十善戒を改め十の麻駄免徒と名づけ、比丘尼を改め毘婁善と名づけ、錫杖を改め恵寸苦茂餓阿徒と名づけ、地餅林藤を改め麻三の菓と名づけ、数珠を改め混多須と名づく。

### 2.2.3.2 新井白石に記録されたキリスト教用語

イエズス会士シドッティ Giovanni Battista Sidotti は鎖国下の日本布教を志し、1708 (宝永5) 年、屋

久島に上陸して捕らえられた。翌年、江戸に移送され、新井白石から訊問を受けた。白石は尋問の記録を基に、1715（正徳5）年以降『西洋紀聞』の執筆にとりかかり、没年頃まで手を加えた（日本キリスト教歴史大事典編集委員会、1988）。この書には多くのキリスト教用語が記録されている。以下の引用は松村ほか（校注）(1975)による。

デウス初に天地万物を造らむとするに当りて、まづ善人を住しめむために、諸天の上にハライツを作り（ハライツとは、漢に訳して、天堂といふ。仏氏いはゆる極楽世界のごとし）、無量無数のアンゼルスを作る（アンゼルスは、仏氏いわゆる光音天人の類。ポルトガル語に、アンジョといふなり）。其後に、大地世界を作りて、タマセイナを取て（タマセイナ、此に清浄土といふが如し）、男を作りて、アダンといひ、其右脇の一骨を取て、女を作りて、エワといふ。

## 2.3 幕末維新復活期 [1854～1873年]

### 2.3.1 社会状況

江戸幕府は1854（嘉永7）年に日米和親条約を、1858（安政5）年に日米修好通商条約を締結する。この結果、開港地での教会建設が認められ、1862（文久2）年に横浜、1864（元治元）年には長崎にカトリックの天主堂が建設された。こうして、長崎大浦天主堂における潜伏キリシタンとパリ外国宣教会のプチジャン Bernard Thadée Petitjean 司教との歴史的な再会が果たされることになる。維新後、明治新政府はキリスト教禁教政策を続けるつもりであった。しかし、欧米各国から強い抗議を受け、1873（明治6）年に切支丹禁制の高札を撤去する（片岡、1957；高木、1978-80）。これは、日本の近代化、国際化による必然的帰結であった。

### 2.3.2 キリスト教用語の矯正

本項では、潜伏キリシタン・カクレキリシタンをカトリック教会に呼び戻すために長崎大浦天主堂司教プチジャン Petitjean が採った言語戦略について記し（2.3.2.1）、キリスト教用語の問題について、カトリックの洗礼を受けて教会に戻った潜伏キリシ

タン、カトリック教会に戻ることなく潜伏形態の信仰を続けたカクレキリシタンの立場から記述し、考察を行う（2.3.2.2）。紙幅の都合上、九州地方における事例についてのみ記述する。また、プロテスタントについても同じ理由で別稿に譲る。

#### 2.3.2.1 プチジャン Petitjean の言語戦略

プチジャン Petitjean は、潜伏キリシタンを教会に呼び戻し、正式なカトリックの教化を行うために腐心し、中世末期から伝わるキリスト教用語を用いた教理書の編纂・出版を思いつく。彼は潜伏キリシタンが所持する書物を収集し、そこに記されたキリスト教用語を用いて教理書を作成した（松崎、1928；ラウレス、1940；海老澤、1943）。彼の書簡にはこの言語戦略の意図が記されている。以下の引用は彼が横浜教会のジラルル Prudence-Seraphin-Barthélémy Girard 教区長に宛てて書いた1865（慶応元）年5月29日付の書簡の一部である。引用は純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（1986）による。

ラテン語とポルトガル語の用語の問題に関してローカニウ師と私は、残念ながら親愛なるムニクウ師の意見は実行できないのではないかと、思っています。（中略）彼らの使っている言葉を、彼らから取り上げてしまうことは、私たちが彼らのものと全く違った宗教の指導者のように思わせてしまうことです。

書簡中の「ムニクウ師」は横浜教会の神父で、中国四川省で出版された漢語の教理書を直訳して『聖教要理問答』を編纂した人物である。彼は横浜での教理書編纂にあたり、中世末期から伝えられたキリスト教用語ではなく、漢語による翻訳語を用いるべきだと考えていた。しかしプチジャン Petitjean は、潜伏キリシタンが先祖伝来のキリスト教用語を用いていることに気づき、彼らを教会へ呼び戻すには彼らが使っていることばを用いるべきだと考えたのである。この言語戦略に則って編纂・出版された教理書に『聖教日課』（1868年刊）がある。こうした彼の努力により九州西北部では多くの潜伏キリシ

ン・カクレキリシタンが教会に戻り（教会に戻った潜伏キリシタンは復活キリシタンと呼ばれる）、洗礼を受けることになった（松崎，1928）。以下の引用は明治文化研究会（1928）による。

びるじんさんた  
童身聖まりやは、さんがぶりゑるあるかんしよを  
もつてごつげ  
以 御告ありければ、其御胎内において天主の御子  
なりたま  
ひりよは人と成給ふ

### 2.3.2.2 教会に戻ることなく潜伏形態の信仰を続けた人々

多くの潜伏キリシタンが教会に戻る一方、教会に戻らず、潜伏形態の信仰を続けた人々がいた。カクレキリシタンである。彼らが潜伏形態の信仰を続けた理由は詳らかでない。しかしプチジャン Petitjean が、潜伏キリシタンが代々伝えてきたキリスト教用語の矯正に努めたことは注意されてよい。以下は1865（元治2-慶応元）年に書かれた彼の日記風の覚え書きである。引用は純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（1986）による。

最初から、私たちに大変信頼を示していたこの水方は、私たちの前で洗礼の式分を、ためらわずに誦えました。（中略）私たちは彼の式文は疑わしいと思いましたのでそれを訂正し、又、訂正された式文に忠実に従って、洗礼の務めを続行するように、それから出来るだけ度々司祭館に私たちを訪ねて来るように勧めました。

「正統なカトリックの教化を行う」ことを念頭に置けば、彼の行動は是とされるべきであろう。しかし、この行動は潜伏キリシタンを動揺させた。浦上の潜伏キリシタンの指導者であったドミニコ又一は「指導された洗礼式のラテン語を巧く発音できないこと」を理由として、彼に水方（指導職）の辞職を願い出ている（浦川，1915）。又一は彼を「先祖伝来の信仰の正統な指導者」と認めて辞職したのである。しかし、そのように認められない人々もいた。結局、当時の潜伏キリシタン・カクレキリシタンの半数弱は教会に戻らず、潜伏形態の信仰を継続する

ことになったのである（田北，1970）。

## 2.4 近代差別期 [1873～1945年]

### 2.4.1 社会状況

1889（明治22）年、大日本帝国憲法の発布により信教の自由が保障される。しかし、近世禁教期以来の迫害と差別は1945（昭和20）年の太平洋戦争終結まで継続した（田北，1970；木場田，1975；高木，1985）。近代天皇制国家の樹立を目指す為政者には、神の下の平等を説くキリスト教の教えは不都合だった（金田，1985）。また、信徒を奪われることを恐れた在来宗教の抵抗も大きく、組織的なキリスト教排斥運動が展開された（大濱，1979；安丸・宮地（校注），1988；児玉，2005）。対米英開戦後には、キリスト教は敵性宗教と見なされ、治安維持法による厳しい取り締まりを受けた（土肥，1980）。

### 2.4.2 差別語として使用されるキリスト教用語

キリスト教徒に対する厳しい迫害と差別が続いたこの時期、九州西北部ではキリスト教用語「キリシタン」「バテレン」「アーメン」「ゼンチョ」、また「ヤソ」「ゲドー」などの語が差別的な意味を含みながら「キリスト教信者」を意味する語として使用されていた（木場田，1975；小川，2007a）。小川（2007a）には、九州地方におけるキリスト教・キリスト教徒に対する差別意識の有無、1948（昭和23）年におけるカトリック教会の建立地が地図上に示されている。この調査は2003（平成15）年から2005（平成17）年にかけて実施された。被調査者はおよそ1915（大正4）年から1945（昭和20）年の間にお生まれの方々である。1948（昭和23）年当時、教会の建設が進み、多くのカトリック信者が暮らしていた長崎県の離島・沿岸地域において「かつては差別・差別意識があったが、今はない」と回答されている。そして、この回答がなされた地域と、差別的な意味を持つキリスト教用語が使用された地域とが重なっているのである。

2.2.2.2で取り上げた「バテレン」は禁教時代を通じて様々な意味に変化し、現代に伝わっている。徳島県や香川県小豆島では「バテレン」が「元気な娘」「おてんば」の意味で用いられ、新潟県佐渡では「放蕩者」や「道楽者」を表す語として使用されている

(日本国語大辞典第二版編集委員会, 2000-2002). 福岡, 佐賀, 長崎, 熊本の4県では「神父」「修道女」「カトリック信者」「外国人」「変な人」「お転婆な女の子」「素性の悪い女」「お洒落な人」の意味で「バテレン」が用いられてきた(小川, 2007b).

「ゼンチョ」はポルトガル語 Gentio (異教徒) に由来する語である。「異教徒」の意味で用いられている「ゼンチョ」が, 長崎県の離島・沿岸地域を中心に, 福岡, 佐賀, 熊本の4県において使用されている。また「仏教徒」という意味や, 仏教徒の子どもがキリスト教徒の子どもをからかう語としても使用されている(Ogawa, 2010b)。「ゼンチョ」も「バテレン」と同様に, 人間をマイナスに評価する語としての使用がみとめられる。

「アーメン」はカトリック教会において, 祈りの際に用いられる「そうなりますように」といった意味合いの語である。「アーメン」は長崎県の各地で「カトリック教徒」を意味する差別語・蔑称語として用いられてきた(小川, 2007a)。

以上のように「バテレン」「ゼンチョ」「アーメン」の3語はネガティブな意味を持つ語, 差別語, 蔑称語として使用されている。各語の意味が, いつ, どこで, どのように変化し, その用法が伝播したのかについては今後の研究を待たねばならない。しかし, 少なくともその背景に, 300年近くに及ぶキリスト教禁教政策, 禁教政策によって人々の間に醸成されたキリスト教邪教観があることは間違いなさだろう。

### 2.4.3 キリスト教用語に対する低評価

ここでは『女学雑誌』における記述から, 当期におけるキリスト教用語に対する低い評価を確認する。

同誌の編集兼発行を務めた巖本善治は, プロテスタントであった。以下に引用する文章は, 彼が長崎を旅行した時の見聞に基づいて書いたものである。カトリック教会に戻らぬカクレキリシタンを「頑迷」と評し, 彼らのキリスト教用語による祈禱文を「稍や音を誤まりたるもの」と低く評価している。

他の無数の天主教信徒は, 依然柵の下に光を包みて陰に其信仰を守りたり。而して, 聖經を用ひざるによりて, 教理は父之を子に遺こし, 子之を孫に伝ふ。既に教理の躰を失なひたるものも, 「斯道に抛らざれば救はれがたし」との信仰を語り伝え, 殆んど無衷の姿にて之を堅守するものありき。(中略) 其祈禱するや, ラテン語, イスパニア語, ポルトガル語などを用ゆ。祈るもの其意味を知らず, 聞くもの, 亦た之を解せず。例せば, キーレンス, キレーレンス, 云々の如き, (中略) こは, 吾主よ, 吾神よ, 吾が罪を赦し玉へ云々の祈禱文が稍や音を誤まりたるものなるや疑がひなし。(中略) 今の肥前近在の旧信徒が頑迷なるによりて, 四百年前来の遺伝歴々として絶えざることを認知すべし。

(巖本善治「迎春行」1892(明治25)年4月30日刊『女学雑誌』第315号所収, 女学雑誌社)

なお, 巖本が低く評価するのは「カクレキリシタンが話す原語の語音・意味から変容した」キリスト教用語である点に注意すべきである。彼の評価・態度は, 「潜伏キリシタン・カクレキリシタンが話す」キリスト教用語を矯正しようとしたプチジャン Petitjean のそれに連なるものと解釈される。

### 2.4.4 キリスト教用語に対する高評価

#### 2.4.4.1 史学者・文学者による評価

前々項, 前項のとおり, 当期, キリスト教・キリスト教用語は一般にマイナスイメージと結びついてきた。しかし, 一部の史学者, 文学者など知識人の間では, これを高く評価し, 研究の対象として捉え, 記録・活用しようとする動きがみられるようになる。その先導役を果たしたのが『史学雑誌』であった。

まず1895(明治28)年1月刊の第6編第1号に坪井九馬三「古書古文書に見ゆる耶蘇教関係の言語」が掲載され, ハライゾ paraiso やクルス Cruz など32語が紹介された。翌1896(明治29)年6月刊の第7編第6号には, 村上直次郎「古書古文書に見ゆる欧語の出处」が掲載された。さらに1897(明治30)年10月刊の第8編第10号には村川堅固「天草耶蘇教会徒の遺孽」が掲載された。村川は, 潜伏キリシタン・カクレキリシタンが伝承し, 原語から

転訛したキリスト教用語を好意的に紹介している。

羅典語の祈禱文を誦じ、以て昼間の読経を消滅せしむ、これ所謂経消しなり、其羅典文は、水方が口より口に伝授したるものなるが故に、甚しく転訛、今日之を原文に復し難しといふ、而して其水方は非常に秘して、決して之を他村に知らしめず、(中略)往昔西教盛行の紀念として、吾人をして懐古の情に堪えざらしむるものは、僧父野人が口にする、転訛せる羅典語なり、最も普通なるはパーテル、サンタ、クルス及ドミニカ様等なり

変容したキリシタン信仰とキリスト教用語とを高く評価する言説は、1910(明治43)年に発表された上田敏の自伝的小説『うづまき』にもみとめられる。引用は矢野(1966)による。

三百年が間、長崎の漁民の一部が「悲のみすてりよ」を父子相伝して、「日色瑪尼の森の中にて、膝の観念なし給ひ、御血の汗を流し給ふ時の御悲、石の柱に搦付られ、五千に余る打擲受け給ふ御悲、御頭に荊の冠を押入れ給ふ時の御悲、親ら十字架を担げ給うて、加羅瓦略が嶽に赴き給ふ御悲、十字架に掛り死し給ふ時の御悲」と、切支丹の「こんたす」を忘れなかつたのも、万国の文化を併呑して、いつか自家葉籠中の物と化す日本民族独得の好奇心が促した努力では無いか。これあればこそ聖徳太子、弘法大師の大業は成就し、近くは明治の革新も出来た。

#### 2.4.4.2 「南蛮趣味」文学の隆盛

キリスト教用語に対する高い評価は、北原白秋・木下杢太郎らが興し、芥川龍之介に引き継がれた「南蛮趣味」文学の隆盛に繋がる。人口に膾炙した白秋の詩集『邪宗門』(1909(明治42)年、易風社)や杢太郎の戯曲「南蛮寺門前」(1909(明治42)年、『スバル』第2号所収)には多くのキリスト教用語が用いられている。以下に『邪宗門』から「邪宗門秘曲」の第2連をひく。引用は筑摩書房(編)(1973)による。

目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、禁制の宗門神を、あるはまた、血に染むる聖磔、芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、波羅葦僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

## 2.5 戦後受容期 [1945年～]

### 2.5.1 社会状況

1945(昭和20)年8月15日、太平洋戦争が終結する。そしてGHQの指導のもと、大日本帝国憲法に代わる日本国憲法が制定された(1946(昭和21)年11月3日公布、1947(昭和22)年5月3日施行)。新しい憲法の条文のうち、キリスト教・キリスト教用語にきわめて大きな影響を及ぼしたと考えられるのが、法の下での平等(第14条)と信教の自由の保障(第20条)の2点である。

2009(平成21)年3月、筆者は、長崎市浦上天主堂において同地のカトリック信者に対する聞き取り調査を行った。その際「キリスト教・キリスト教徒への差別はいつまで続いたか」との筆者の質問に対し、明確に「終戦まで」との回答を得た。さらに「戦時中はカトリックに対する迫害が激しかった。軍隊でも学校でも差別を受けた」とも言われた。しかし終戦を境に九州西北部における人々のキリスト教・キリスト教徒に対する差別・差別意識は薄れていったようである(小川, 2007a)<sup>5)</sup>。

また、陣内(2007)の指摘するとおり、戦後、特に1970年代以降のポスト経済成長期以後、日本社会のポストモダン化が進み、個人の自由と多様な価値観が尊重されるようになってゆく。そのことがキリスト教に対する評価をマイナスからニュートラルの位置へと動かし、これを背景に、キリスト教文化やキリスト教用語を「娯楽」(井上, 2000)の対象として消費し、楽しもうとする風潮が生まれた。

### 2.5.2 キリスト教用語の地位向上

このような日本社会の変容と並行して、2.4.2でみた「キリシタン」「バテレン」「アーメン」「ゼンチョ」などの差別的な意味を含んだキリスト教用語は使用されなくなっていく(小川, 2007a)。以下では、当期におけるキリスト教用語の地位向上を、



7つの事例から検証する。

### 2.5.2.1 「南蛮趣味」文学の系譜

当期における「南蛮趣味」文学のうち、最も広く読まれた作品の1つに遠藤周作の『沈黙』(1966(昭和41)年刊)がある。この作品には多くのキリスト教用語が効果的に用いられている。以下の引用部分は、主人公である司祭ロドリゴが捕らえられ、役人から取り調べを受けた後の場面である。牢舎では、キリシタン信徒たちがロドリゴと役人とのやりとりで聞き耳を立てていた。引用は遠藤(1975)による。

すると理由もなく司祭の胸から熱いものがこみあげ、眼ぶたに涙のにじむのを感じた。それは何か大任をやりとげたあとの感情に似ていた。今まで静かだった牢舎から、突然、だれかが唄を歌いはじめた。

参ろうや、参ろうや  
 パライソの寺に参ろうや  
 パライソの寺とは申すれど  
 遠い寺とは申すれど……

彼が番人につれられ板の間に戻されたあとも、唄は長い間、続いている。少なくとも自分はその信徒たちの心を迷わせたり、彼等の信仰をくじけさせることはしなかった。自分ほみにくい卑怯な態度をとらなかったと彼は考えた。

牢舎に繋がれた信徒の唄は揺るがぬ信仰告白であり、司祭ロドリゴの心を励ますものとして効果的に描かれている。そもそもこの唄は長崎県平戸市生月町山田のカクレキリシタンに伝えられてきたものである。遠藤は『沈黙』の中でこの唄を登場人物に3度歌わせている。その後も、片岡(1988)『聖ジュワンの水』や坂東(2007)『パライソの寺』など多くの作品で繰り返し取り上げられ、利用されている。

明治末に始まる「南蛮趣味」文学の系譜は、途絶えることなく今日に至っている。2001年に第124回の芥川賞を受賞した青来有一の『聖水』には、変容したキリスト教用語を含むカクレキリシタンのオラショが度々引用されている。内容からみれば『聖

水』は「南蛮趣味」文学とはいえないが、キリスト教用語を利用している点は共通する。2008年には飯島和一により『出星前夜』が書かれた。キリスト教用語を多用する本作もまた「南蛮趣味」文学の系譜に連なるものである。これらの作品は、今日においてなお、文芸界においてキリスト教用語が重宝されていることを示している。

### 2.5.2.2 『天地始之事』に対する評価の向上

当期においても潜伏キリシタンの口頭伝承『天地始之事』に対する評価は分かれていた。1つは片岡弥吉に代表される正統なカトリックからの逸脱・離反とみる見方である。次に引用する片岡(1972)には、その立場がはっきりと表明されている。

「天地始之事」はこのような外的、内的条件の異常さ(迫害と禁教—引用者注)の中で、聖書物語の原形に、多くの異質的要素が混成され、土俗信仰の変容を来したものである。しかし、それをよい意味の風土化と見るのは妥当ではなく、政治、社会、宗教などの異常な環境条件が、いかに人間の思想や信仰まで異常化させるかということの事例として大切な意味を持つのではあるまいか。

片岡は『天地始之事』を「人間の思想や信仰まで異常化させ」た事例と捉え、潜伏キリシタン・カクレキリシタン信仰そのものに対しても「カトリックからの離脱」とみて評価しない(片岡, 1967)。カトリック信徒である片岡の評価・態度は、プチジャン Petitjean や巖本善治のそれに連なるものと考えることができる。

他方、『天地始之事』を民俗学的資料として、キリスト教信仰の土着化、血肉化の結果として高く評価する見方もある。以下に引用する田北(1970)はこの立場を代表するものである。谷川(1982)や紙谷(1986)も同様である。『天地始之事』の評価は高まりつつある。

潜伏(かくれ)キリシタンの現存については、評価はまちまちであるが、私はここに日本人の宗教的特性の一つのあらわれとして、軽視できないものを

見ている。潜伏キリシタンの半数強は百年前に教会に戻ったが、残りの半数弱は潜伏状態を続けた。そこには布教上の不手際もあるが、それを責めるよりは、むしろ貴重な宗教民俗学の資料を保存することとなった結果の方を重視すべきである。史的キリシタンの不完全な残存として軽視せず、日本の土壌にしみこんで根付いたキリスト教の民間下層を重視すべきである。『天地始之事』はこの資料価値を代表している。

### 2.5.2.3 合唱作品におけるキリスト教用語の利用

合唱作品にも「南蛮趣味」文学と同様にキリスト教用語が用いられるようになる。その嚆矢は柴田南雄『宇宙について』(1979(昭和54)年に完成・初演, 1984(昭和59)年に全音楽譜出版社から出版)である。柴田は1978(昭和53)年9月に平戸市生月町を訪れ、カクレキリシタンのオラショを採譜し、『宇宙について』に利用した。また長崎市出身の大島ミチルが1984(昭和59)年に『男声合唱曲組曲「御誦」』(ヤマハミュージックメディア)を、千原英喜が1999(平成11)年に『混声合唱のための「おらしょ」』(全音楽譜出版社)をともにカクレキリシタンのオラショを用いて作曲、出版した。なお、千原には中世近世受容期に出版されたキリシタン資料を題材にした『混声合唱のためのどちりなきりしたん』(2003(平成15)年, 全音楽譜出版社)、『天地始之事』を題材にした『混声合唱のためのきりしたん天地始之事』(2007(平成19)年, 全音楽譜出版社)もある。

### 2.5.2.4 キリスト教用語の商業的利用

キリスト教用語の商業的利用の事例として、長崎県雲仙市のお菓子「クルス」、長崎県島原市の焼酎「バテレン」、大分市のお菓子「ザビエル」がある。

「クルス」は1964(昭和39)年、「バテレン」は1973(昭和48)年、「ザビエル」は1962(昭和37)年と、いずれも戦後に開発・命名された商品である。生産者・命名者ともキリスト教徒ではない。命名の動機は「当地にふさわしい、魅力的かつ印象的な商品名を付けたい」というものであった。かつてはキリスト教・キリスト教徒に対する迫害・差別と結び

ついていたキリスト教用語が、商品価値を高めるために選ばれ、利用されているのである。

このようなキリスト教用語の利用は企業の経済活動のみに留まらない。宮崎県日向市には、その形状から「十文字の海」と呼ばれる観光地があった。近年この観光地は「クルスの海」と再命名され、観光PRが行われている。

大分県速見郡日出町では2006(平成18)年10月に「第1回ザビエルの道ウオーキング大会」が開催された。毎年1回行われ、2009(平成21)年10月には第4回大会が開催された。

大阪府堺市では毎年「堺まつり」が開催されている。2009(平成21)年度は、10月16,17日に開催された。本年度のテーマは「SAKAIはSEKAIへ! Ecology & Eternity ~エコを未来へ~」であった。同祭の開催を機に作られたマスコットキャラクターの名は「ザビエコくん」である。

### 2.5.2.5 国立劇場での「オラショ」口演

国立劇場における最初の「オラショ」口演は1977(昭和52)年7月8,9日に行われた。国立劇場「日本音楽の源流」シリーズ第4回「近世の外来音楽」の中で取り上げられ、長崎県平戸市生月町のカクレキリシタンが招待された。その後「オラショ」口演は度々行われ、2000(平成12)年4月27,28日には「文化財保護法50年記念国立劇場第25回音楽公演日本音楽の表現 祈り—うたの始原をたずねて」の中で、また2007(平成19)年9月15日には「特別企画公演『祈りのかたち』」の中でそれぞれ招待口演が行われている。なお、国立劇場での最初の「オラショ」口演の前年には、東芝EMIより1605(慶長10)年に長崎で出版された『サカラメント提要』中の全ての典礼音楽と生月カクレキリシタンの「オラショ」を収めたLPレコードが発売された。その後、同種のCDは多数発売されている。また、1977(昭和52)年10月9日にはテレビ朝日系列のテレビ番組「題名のない音楽会」で「かくれキリシタンの祈り」と題する特集が放送された。

小林(1996)は将来における方言の「文化財的保存」を予想しているが、キリスト教用語は現在すでにその対象となっている。2000(平成12)年に国立劇

場において「文化財保護法50年記念」として「オラショ」口演が行われたことは「文化財的保存」対象としてのキリスト教用語の位置と価値を物語っている。

### 2.5.2.6 キリシタン資料館の開設

潜伏キリシタン・カクレキリシタンの暮らした九州西北部地域では、1980（昭和55）年頃から言語を含む彼らの習俗を記録・保存しようとする動きがみられるようになる。「オラショ」や遺物などを保存・展示する主なキリシタン資料館を開館年の順に挙げると、次のとおりである。

- 1977（昭和52）年 キリシタン資料館（旧福江市）
- 1979（昭和54）年 長崎市外海歴史民俗資料館（旧西彼杵郡外海町）
- 1982（昭和57）年 平戸切支丹資料館（平戸市）
- 1988（昭和63）年 キリシタン資料館 天草ロザリオ館（旧天草郡天草町）
- 1995（平成7）年 平戸市生月町博物館「島の館」（旧北松浦郡生月町）。

### 2.5.2.7 キリスト教・キリスト教用語のキリスト教的意味の脱落と一般化

近年、多くのキリスト教用語がキリスト教的意味を脱落させたかたちで、非キリスト教徒にも広く用いられ始めている（千代崎、1989；鈴木、2006；岩村、2009）。「天国」「洗礼」などである。「祖父は天国に行った」「新人は厳しい洗礼を受けた」などは、非キリスト教徒にも受け入れられた表現である。他にも、鈴木（2006）は「低迷競馬に救世主？」「健康食品の『バイブル本』にどうつきあえば？」「広告が福音だった？」などの例を挙げる。

言語以外にも似た事例がある。代表的なものにクリスマス、十字架のネックレス「クルス」、キリスト教会式結婚式がある。クリスマスはもはや「年中行事」化しつつある。十字架のネックレス「クルス」は、近年若い女性のファッションとして流行した。小林（2004）は、現代における若年層の方言が「共通語と切り替え可能なスタイルの一種」から「共通語の中に適当に投入され、対人関係上の心理的効果を持つ要素」になりつつあるとみて、これをファッションの服飾要素であるアクセサリーにたとえ、「方言のアクセサリー化」と呼んでいる。キリスト

教的文脈と無関係に受容・消費される十字架のネックレス「クルス」は、文字どおりのアクセサリーである。

リクルート社の「結婚トレンド調査2009」によると、2005（平成17）年、キリスト教（教会）式、人前式、神前式、仏前式、その他の挙式形式のうち、キリスト教（教会）式による結婚式を挙げた夫婦の割合は68.4%である。その後、その割合は年々わずかながら減少し、人前式、神前式を選ぶ夫婦が増えている。しかし、2009（平成21）年においても60.4%がキリスト教（教会）式を選んでおり、他を圧倒している（「挙式形式と披露宴・披露パーティ会場」（リクルート社HP内文書））。彼らは結婚を機にキリスト教徒になるわけではなく、「ウェディング・ドレスを着たい」などの理由からキリスト教（教会）式の結婚式を選んでいるようである。

NHK世論調査部（1984）は、1981（昭和56）年11月に実施された世論調査の結果を示す。これによれば、「キリスト教に親しみを感じている」と回答した人の割合は12%である<sup>6)</sup>。石井（2005）は、1999（平成11）年11月及び2004（平成16）年10月に実施された世論調査の結果を示す。これによれば「キリスト教をひじょうに信頼できる／まあまあ信頼できる」と回答した人の割合は、1999（平成11）年では29.7%<sup>7)</sup>、2004（平成16）年では38.7%<sup>8)</sup>である。NHKの調査は「親しみ」を、石井の調査は「信頼感」を問うているため、3つの調査結果を単純に経年比較することはできないが、3つの調査から、近年、日本人にキリスト教が受け入れられつつあると解釈することは許されよう。そして、このようなキリスト教に対する意識の変化が、キリスト教用語の一般の人々による受容、商業における積極的な利用の背景にあると考えられる。

### 2.5.3 第2バチカン公会議

1962（昭和37）年から1965（昭和40）年にかけて、バチカンで「カトリック教会の現代化」をテーマに「第2バチカン公会議」が開催された。そして、カトリック教会が執り行う典礼、ミサ、秘蹟、婚姻の挙式、聖務日課、教会音楽における各国現地語の使用が認められた（南山大学、1986）。その結果、日

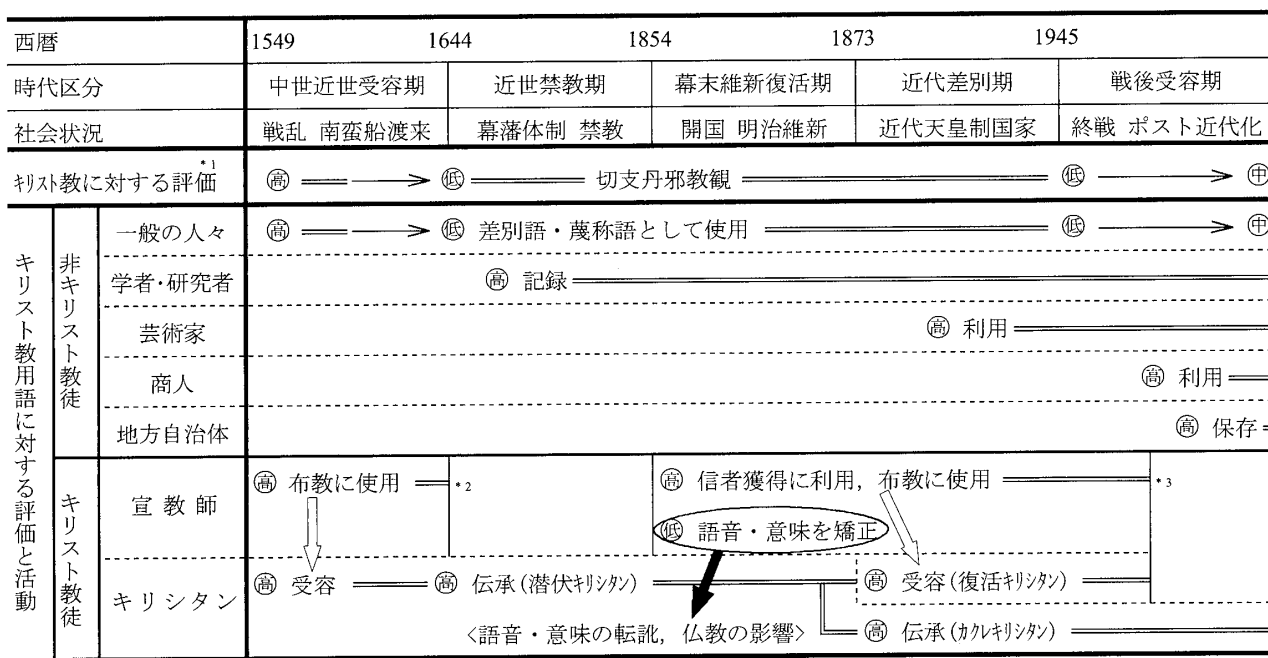


図1 日本社会の変容とキリスト教・キリスト教用語に対する評価と活動

本ではそれまでラテン語によって行われていたミサが日本語で行われるようになった。すなわち、カトリック教会から中世近世受容期以来の伝統を持つキリスト教用語（ポルトガル語・ラテン語起源のことば）が消えることになったのである。

### 3. 結 論

以上、日本キリスト教史を全5期に分け、キリスト教用語の歴史を社会との関連で記述してきた。これを1.2で紹介した小林(1996), 井上(2000), 陣内(2007)にならって図にして示したのが図1である。図の説明を以てまとめとする。図中の=は状態の継続, →は連続的な変化を表す。

中世近世受容期に渡来した宣教師は、初めは翻訳語、後に原語を用いてキリスト教の信仰に必要な概念を日本人に伝えていった。その結果、信者にキリスト教用語が受容された。キリスト教そのものが高く評価され、受け入れられたのである。しかし、その状況は永続せず、伴天連追放令などを契機として、キリスト教は排斥の対象となってゆく。

近世禁教期、宣教師は為政者の禁教政策によって国外に去る。そして、キリスト教は邪教であると評

価・認識されるようになる。この評価・認識は深く広く浸透し、これが好転するのは、1945(昭和20)年の太平洋戦争終結まで待たねばならなかった。この邪教意識を背景に、人々の間でキリスト教用語の一部がマイナスの意味を持つ語として使用されるようになった。他方、江戸では学者である新井白石によりキリスト教用語が記録された。渡来宣教師を失った潜伏キリシタンはキリスト教用語を代々口伝していったが、その過程で次第に原語の語音・意味から外れ、転訛し、また仏教などの影響を受けた。

幕末維新復活期に至り、長崎大浦天主堂のプチジャン Petitjean 司教により潜伏キリシタンの伝えたキリスト教用語が発見・記録された。彼は潜伏による転訛を矯正し、キリスト教用語を信者獲得のために利用した。こうして、教会に戻った潜伏キリシタン(=復活キリシタン)は、宣教師からキリスト教用語を受容した。他方、教会に戻らなかった潜伏キリシタンのキリスト教用語は転訛し続け、それは今日のカクレキリシタンにおいても同様である。こうして当期以降、キリスト教用語に対する評価は複雑なものとなってゆく。プチジャン Petitjean にとってのそれは、信者獲得に役立つものである一方、潜

伏キリシタンの話すキリスト教用語は「訛り誤った」ものであり、矯正すべきものであった。しかし潜伏キリシタンにとってはその「訛り誤った」キリスト教用語こそが、先祖代々受け継いできた大切なことばであり、高く価値づけられていた。この評価は今日のカクレキリシタンに受け継がれている。キリスト教徒ではない一般の人々には、キリスト教に対する評価と同様、キリスト教用語の価値は低いままであった。

近代差別期、大日本帝国憲法の発布により信教の自由が保障されたものの、近代天皇制国家に不都合なキリスト教は迫害・差別の対象となった。また、一般の人々のキリスト教・キリスト教用語に対する評価も依然として低いままであった。『女学雑誌』の編集兼発行人を務めた巖本善治は、カクレキリシタンが用いる語音・意味の変化したキリスト教用語を低く評価している。プロテスタント信徒であった巖本は、明治女学校の創立に関わり、後に校長を務め、キリスト教精神による女子教育に尽くしている。このことから分かるように、彼の立場は、プチジャン Petitjean ら「宣教師」のそれに近いものであった。しかし、当期、これまでキリスト教徒以外には一般に低く価値づけられていたキリスト教用語を高く評価する人々が現れる。すなわち、坪井九馬三、村上直次郎、村川堅固ら史学研究者による記録、上田敏、北原白秋、木下杢太郎らによる文学作品での利用がみられるようになるのである。

戦後受容期、太平洋戦争の終結、基本的人権の尊重と信教の自由の保障を謳う新憲法の制定、自由、平等、個性尊重を標榜するアメリカ的教育を背景に、キリスト教邪教観は薄れてゆく。そしてこうした社会状況に呼応するようにキリスト教用語はその価値を高めていった。しかし、純心女子短期大学(現長崎純心大学)教授を務めたキリシタン研究者片岡弥吉は、語音・意味の変容したキリスト教用語を多く含む潜伏キリシタンの『天地始之事』を低く評価している。近代差別期以降、他の学者・研究者がキリスト教用語(原語の語音・意味から外れ、転訛した潜伏キリシタン・カクレキリシタンの話すキリスト教用語も含む)を高く評価し、記録し始めたこと

と相反する態度・評価だが、それは彼がカトリック信徒であったことを考えれば、プチジャン Petitjean や巖本善治の態度・評価に連なるものであったと捉えることができる。しかし、片岡が低く評価した『天地始之事』も、これを高く評価する見方が一般的になりつつある。また、芸術界では文学作品のみならず合唱作品においてもキリスト教用語が利用されるようになった。さらに、社会のポスト近代化とともに、キリスト教は日本人にとってより身近なものとなってゆく。商品名やイベント名につけられるなど、キリスト教用語の商業的利用も進んでいる。行政も「無形文化財」として保護・保存に動くようになった。キリスト教用語は、今日ますますその評価・価値を高めつつあるといえる。

#### 4. おわりに

紙幅の都合上、本稿で取り扱えなかった問題を整理して記せば次のとおりである。①中世近世受容期から近世禁教期におけるキリスト教用語の実態や価値についての記述が不十分である。②幕末維新復活期以降のプロテスタントの宣教とキリスト教用語の関係についても記述が不十分である。③カトリック教会の宣教とキリスト教用語の関係については、ある程度その実態を明らかにできたが、九州以外の地域における実態の解明は進んでいない。

紙幅の都合及び資料の制約から、これまで明らかにされた事実の中から時代を象徴する(代表する)と思われるできごとを取り上げて本論を構成した。しかし、点を繋げて線にし、それを以て歴史を描いたとする態度は厳に慎まなければならない。より広く、より丁寧に事実を掘り起こし、記述しなければならない。そのことを通じて、図1をよりいっそう真実に近づけてゆくことが必要である。

④中国や韓国など日本と似たキリスト教史を持つ諸外国の事例との比較・対照研究も今後の課題である。

#### 謝 辞

本稿の執筆にあたり、臨地調査にご協力くださった被調査者の皆様、ラテン語の祈り及びカトリック

教会における典礼についてご教示くださった元エリザベト音楽大学の西尾優先生、多くの有益で貴重なお指摘・ご提案を賜った査読者の先生方に篤く御礼申し上げます。

## 付 記

本稿は、日本学術振興会平成 20・21 年度科学研究費補助金若手研究（スタートアップ）（課題番号 20820061「九州地方域方言における渡来語の受容史についての地理言語学的研究」）の研究助成による成果の一部である。

## 注

- 1) このことについて海老澤(1970)は「キリスト教と仏教という対蹠的哲学をもつ二大宗教の直接交渉は、日本においてのみ見られるところである。かつ精神的には日本浄土教の阿弥陀信仰と、その前における人間認識、衆生の悉皆成仏という救済信仰の上に、キリシタンが伝えられ、仏教語を媒介として教理・信仰の伝達を図ったということは、贖罪信仰への昇華を導く契機ともなったことにおいて注意すべきである。それはわざと仏教の真似をしてごまかそうとしたものではなく、伝える側も伝えられる側においても自然の成り行きであったと言ってよい。宗教・哲学的概念の媒介には仏教語しかなかったからである」(p.600)と述べている。
- 2) 翻訳語を用いるのか、それとも原語を用いるのかという問題については、同時期にキリシタンの布教活動が行われた中国でも議論されていた。たとえば Deus については、造語の「天主」、YHWH の音訳語「爺火華<sup>イェフアホア</sup>」、翻訳語の「神主」「神天上帝」「上帝」「皇上帝」などが用いられた(菊地, 2003)。なお、日本における全体的な傾向として「訳語主義から原語主義への変遷」を指摘できるが、布教当初は翻訳され、後に原語が用いられるようになった概念の中に、再び翻訳語が用いられるようになったものがある(たとえば「果報 ⇔ beatus ベアト」(米井, 1998))。その意図や目的、結果については、米井(2009)や小島(2009)などが取り扱うが、未解明の部分も多い。今後の課題である。
- 3) 本稿では「カクレキリシタン」を「キリシタン時代にキリスト教に改宗した者の子孫で、1873(明治6)年に禁教令が解かれた後もカトリックとは一線を画し、潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を組織下にあつて維持し続けている人びと及びその宗教」と定義する。1644(寛永21)年～1873(明治6)年における同種の信仰者及びその宗教を「潜伏キリシタン」と呼び、これを「カクレキリシタン」と区別する。この区別は、姉崎(1925)、片岡(1967)、宮崎(1996、

2002)に従うものである。

- 4) 引用文の振仮名には、①底本の平仮名に適宜漢字を宛て、もとの平仮名を振仮名にしたもの、②底本にある振仮名、③校注者が付した振仮名の3種があり、3種を書き分けている。しかし本稿の論旨とは関わらないため3種の表記を統一した。
- 5) こうした意識の変化と並行するように、戦後、人口全体に占めるキリスト教徒の割合は次第に高まってきている。以下に1948(昭和23)年を起点として10年ごとにその割合を示す。1948(昭和23)年/0.423%、1958(昭和33)年/0.622%、1968(昭和43)年/0.760%、1978(昭和53)年/0.764%、1988(昭和63)年/0.825%、1998(平成10)年/0.867%、2008(平成20)年/0.891%(キリスト教年鑑編集委員会, 2009)。
- 6) 全国300地点から無作為に抽出した16歳以上の男女3,600人が対象。個人面接法。調査有効数(率)は、2,692人(74.8%)。
- 7) 全国167地点から無作為に抽出した満20歳以上の男女2,000人が対象。個人面接法。調査有効数(率)は1,345人(67.3%)。
- 8) 全国167地点から無作為に抽出した満20歳以上の男女2,000人が対象。個人面接法。調査有効数(率)は1,385人(69.3%)。

## 【参考文献】

- 姉崎正治 (1925). 切支丹宗門の迫害と潜伏 同文館  
 青来有一 (2001). 聖水 文藝春秋  
 新垣壬敏 (2004). 日本におけるカトリックの典礼音楽 人文研紀要, 51, 95-130.  
 馬場嘉市(編) (2008). 新聖書大辞典 キリスト新聞社  
 坂東真砂子 (2007). パライゾの寺 文藝春秋  
 筑摩書房(編) (1973). 増補決定版 現代日本文学全集 32 与謝野寛 与謝野晶子 石川啄木 北原白秋集 筑摩書房  
 千代崎秀雄 (1989). 日本語になったキリスト教のことは 講談社  
 土肥昭夫 (1980). 日本プロテスタント・キリスト教史 新教出版社  
 土井忠生 (1933). 日本耶蘇会の用語に就いて 榎垣実(編) 外来語研究, 3, 7-22.  
 江端義夫 (2006). 地理言語学の精神 Oebel, Guido (Ed.) *Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblata*. pp. 111-124. Muenchen: Lincom Europa.  
 海老澤有道 (1943). 切支丹典籍叢考 拓文堂  
 海老澤有道 (1966). 日本キリシタン史 塙書房  
 海老澤有道 (1970). 排耶書の展開 海老澤有道ほか(校注) 日本思想大系 25 キリシタン書 排耶書 岩波書店 pp. 593-606.  
 海老澤有道・チースリク, H.・土井忠生・大塚光信(校注) (1970). 日本思想大系 25 キリシタン書 排耶書 岩波書店

- 越中哲也 (1981). 長崎における排キリシタンの伝承について キリシタン研究, **21**, 15-22.
- 江川清 (2003). 日本人の言語行動の実態 荻野綱男 (編) 朝倉日本語講座9 言語行動 朝倉書店 pp.29-44.
- 遠藤周作 (1975). 遠藤周作文学全集6 新潮社
- 藤原与一 (1991). 昭和日本語の方言7 九州西側〈筑前肥後〉三要地方言一福岡県桜井方言・熊本県白水村方言・熊本県天草大江方言一 三弥井書房
- 五野井隆史 (1990). 日本キリスト教史 吉川弘文館
- 橋本進吉 (1961). キリシタン教義の研究 岩波書店
- 畑中佳恵 (2001). 「長崎」のイメージとしての「南蛮趣味」序論(上) 叙論II, **02**, 2-27.
- 畑中佳恵 (2002). 「長崎」のイメージとしての「南蛮趣味」序論(下) 叙論II, **03**, 179-196.
- 畑中佳恵 (2003). 近代文学における「南蛮趣味誕生」の「同時代」 文獻探究, **41**, 1-23.
- Huntington, Samuel (1996). *The clash of civilizations and the remaking of world order*. Clearwater: Touchstone. (鈴木主税訳 (1998). 文明の衝突 集英社)
- 飯島和一 (2008). 出星前夜 小学館
- 井上史雄 (2000). 日本語の値段 大修館書店
- 井上史雄 (2001). 日本語は生き残れるかー経済言語学の視点からー PHP 研究所
- 井上史雄 (2007). 方言の経済価値 小林隆 (編) 方言の機能 岩波書店 pp.67-104.
- 石井研士 (編) (2005). 日本人の宗教意識・神観に関する世論調査2003年/日本人の宗教団体への関与・認知・評価に関する世論調査2004年報告書 國學院大学 21世紀COEプログラム事務局
- 岩村信二 (2009). 日本語化したキリスト教用語 教文館
- 陣内正敏 (2007). 若者世代の方言使用 小林隆 (編) 方言の機能 岩波書店 pp.27-65.
- 純心女子短期大学長崎地方文化史研究所 (編) (1986). プチジャン司教書簡集 純心女子短期大学
- 紙谷威広 (1986). キリシタンの神話的世界 東京堂出版
- 金田隆一 (1985). 戦時下キリスト教の抵抗と挫折 新教出版社
- 片岡繁男 (1988). 聖ジュワンの水 文眞堂
- 片岡弥吉 (1957). 日本近代国家成立過程に於ける伊万里県(深堀)異宗徒移送事件 キリシタン研究, **4**, 115-168.
- 片岡弥吉 (1967). かくれキリシタン 日本放送出版協会
- 片岡弥吉 (1972). 天地始之事 解題 谷川健一 (編) 日本庶民生活史料集成18 民間宗教 三一書房 pp.1001-1002.
- 菊地秀明 (2003). 太平天国にみる異文化受容 山川出版社
- キリスト教年鑑編集委員会 (編) (2009). キリスト教年鑑2009 キリスト新聞社
- 岸野久 (1986). フランシスコ・ザビエルの「大日」採用・使用について キリシタン研究, **26**, 185-200.
- 木場田直 (1975). 西海の灯ー五島切支丹秘話ー 聖母の騎士社
- 小林隆 (1996). 現代方言の特質 小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎 (編) 方言の現在 明治書院 pp.3-17.
- 小林隆 (2004). アクセサリーとしての現代方言 社会言語科学, **7**(1), 105-107.
- 児玉識 (2005). 近世真宗と地域社会 法蔵館
- 小島幸枝 (2009). コンテムツスムンダの研究 研究篇・資料篇 武蔵野書院
- 米井力也 (1998). キリシタンの文学 平凡社
- 米井力也 (2009). キリシタンと翻訳 平凡社
- ラウレス, ヨハネ (1940). プチジャン司教とキリシタン 伝統 カトリック研究, **20**(2) カトリック研究社 (純心女子短期大学長崎地方文化史研究所 (編) (1986). に再録, pp.225-238.)
- 松村明・尾藤正英・加藤周一 (校注) (1975). 日本思想大系35 新井白石 岩波書店
- 松崎實 (1928). 天主教の部解題 明治文化研究会 (編) 明治文化全集19 宗教篇 日本評論社 pp.5-20.
- 明治文化研究会 (編) (1928). 明治文化全集19 宗教篇 日本評論社
- 皆川達夫 (編) (1976). 洋楽事始 東芝EMI
- 宮崎賢太郎 (1995). キリシタン他界観の変容ーキリシタン時代より現代のカクレキリシタンまでー 純心人文研究, 創刊号, 103-121.
- 宮崎賢太郎 (1996). カクレキリシタンの信仰世界 東京大学出版会
- 宮崎賢太郎 (1998). 日本人のキリスト教受容とその理解 山折哲雄・長田俊樹 (編) 日本人はキリスト教をどのようにに受容したか 国際日本文化研究センター pp.169-212.
- 宮崎賢太郎 (2002). カクレキリシタン 長崎新聞社
- 村上直次郎 (訳) (1968). イエズス会士日本通信上 雄松堂書店
- 長崎県教育委員会 (1999). 長崎県文化財調査報告書153 長崎県のカクレキリシタンー長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書ー 長崎県教育委員会
- 南山大学 (監) (1986). 第2バチカン公会議公文書全集 サンパウロ
- ネウストプニー, J.V. (2003). 日本の言語行動の過去と未来 荻野綱男 (編) 朝倉日本語講座9 言語行動 朝倉書店 pp.1-28.
- NHK 世論調査部 (編) (1984). 日本人の宗教意識 日本放送出版協会
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会 (編) (1988). 日本キリスト教歴史大事典 教文館
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (編) (2000-2002). 日本国語大辞典 第二版 全14巻 小学館
- Ogawa, Shunsuke (2006). A geolinguistic study on the history of acceptance of the Christian vocabulary in the northwestern area of the Kyushu district of Japan. *Dialectologia et Geolinguistica*, **13**, 108-123.
- 小川俊輔 (2007a). 九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Christão の受容史についての地理言語学的研究 広島大学大学院教育学研究科紀要, **55**(2), 173-182.

## 小川：日本社会の変容とキリスト教用語

- 小川俊輔 (2007b). 九州地方域方言におけるキリシタン語彙 pater/padre の受容史についての地理言語学的研究 国文学叢, 192・193, 15-25.
- 小川俊輔 (2007c). 九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Santa Maria の受容史についての地理言語学的研究 国語教育研究, 48, 38-51.
- Ogawa, Shunsuke (2010a). A Geolinguistic study on the history of reception of 'contas' and 'rosario' in the Kyushu district of Japan. *Dialectologia*, 4, 83-106. (e-journal : <http://www.publicacions.ub.es/revistes/dialectologia4/>)
- Ogawa, Shunsuke (2010b). On the decay, preservation and restoration of imported Portuguese Christian missionary vocabulary in the Kyushu district of Japan since the 16th century. *Slavia Centralis*, III(1), 150-161.
- 大濱徹也 (1979). 明治キリスト教会史の研究 吉川弘文館
- 太田正雄 (1981). 木下杢太郎全集9 岩波書店
- Rodrigues, João (1604-1608). *Arte da lingua de Japan*. Nagasaki. (土井忠生訳 (1955). 日本大文典 三省堂)
- 柴田南雄 (1994). 日本の音を聴く 新增補版 青土社
- 鈴木範久 (2006). 聖書の日本語 岩波書店
- 田北耕也 (1970). 天地始之事 海老澤有道ほか (校注) 日本思想大系 25 キリシタン書 排耶書 岩波書店 pp. 631-634.
- 高木一雄 (1978-80). 明治カトリック教会史上・中・下 キリシタン文化研究会
- 高木一雄 (1985). 大正・昭和カトリック教会史3 聖母の騎士社
- 谷川健一 (1982). わたしの「天地始之事」 筑摩書房
- 浦川和三郎 (1915). 日本に於ける公教会の復活 前篇 天主堂
- Viereck, Wolfgang (2006). The linguistic and cultural significance of the Atlas Linguarum Europae. 川口裕司・亀山郁夫・富盛伸夫・高垣敏博 (編) 言語情報学研究, 9, 58-80.
- 矢野峰人 (編) (1966). 明治文学全集 31 上田敏集 筑摩書房
- 安丸良夫・宮地正人 (校注) (1988). 日本近代思想大系 5 宗教と国家 岩波書店

## 【参考 WEB ページ】

- 第4回「ザビエルの道」ウオーキング大会 (日出町 HP 内) <[http://www.town.hiji.lg.jp/cgi-bin/odb-get.exe?WIT\\_template=AC020000&WIT\\_oid=icityv2::Contents::2538](http://www.town.hiji.lg.jp/cgi-bin/odb-get.exe?WIT_template=AC020000&WIT_oid=icityv2::Contents::2538)> (2009年12月7日)
- クルスの海 (宮崎県日向市 HP 内) <<http://www.city.hyugamiyazaki.jp/index.php>> (2009年12月7日)
- 挙式形式と披露宴・披露パーティ会場 (リクルート社 HP 内) <[http://www.recruit.jp/library/bridal/B20091022\\_01/docfile\\_2.pdf](http://www.recruit.jp/library/bridal/B20091022_01/docfile_2.pdf)> (2009年12月7日)
- ザビエコくんの紹介 (第36回堺まつり HP 内) <[http://www.sakai-tcb.or.jp/sakaimatsuri/intro\\_zabieco.html](http://www.sakai-tcb.or.jp/sakaimatsuri/intro_zabieco.html)> (2009年12月7日)
- ざびえる本舗 HP <<http://www.zabieru.com/index2.html>> (2009年12月7日)

(2009年12月11日受付)  
 (2010年9月8日修正版受付)  
 (2010年10月15日掲載決定)